

資料涉猟余話

その95

大火の残滓 篆刻額・不倒鈴木開介

嶋 不 濁

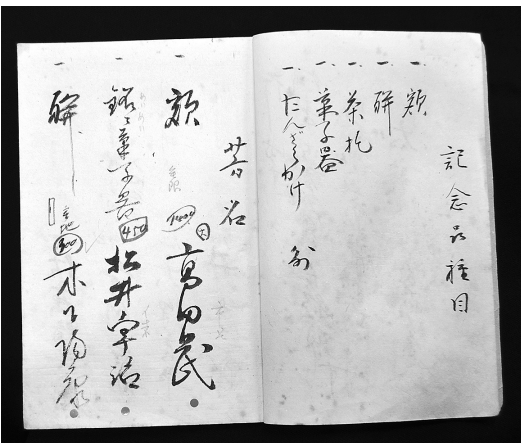
大橋浩堂、萩元旬、齊に続き、篠田渥、木下卓斎といった職人の他にも、吉沢白城、今牧拵平、山田居麓らを輩出した大正期の異様な篆刻ブームの後、戦後昭和30年前後に倉澤興世が彫り出すまでは、どうも中神岳卿や不倒鈴木開介が峡谷の篆刻界を支えていたようだ。しかし、日夏耿之介に愛され



① 太宰楼旧蔵



② 橋南公民館蔵



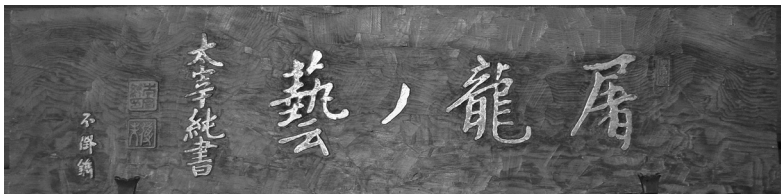
③ 太宰松記念品頒布会名簿



④ 名木展の記念写真 (S38. 2. 24)



⑤ 老舗酒保村田屋の材



⑥ 宮島好堅旧蔵

国に活躍の場を求め、一方、不倒は地元に残ったのだった。

橋南の公民館にもあった②。そうしているうちに、「太宰松記念品頒布会名簿」③

と声をあげたのは昭和27年臘月、その展覧会も開かれた④。名簿をよく見ると、

が明記されている太宰松の材で彫った不倒の篆刻額を追って、

だ。老舗酒保村田屋の庭の枯死した松材に彫った作品⑤。さらに佐竹蓬平生家の枯死した松に彫った

蓬平作品、なども芋づる式に出てくる。

へそ尾曲の思想か！それにしても今の時代の凡夫には、読みや調べが追いつかない。誰か、教えて！

最初に出会ったのは儒学者太宰春台生家跡にあった飯田きつての料理屋・太宰楼旧蔵の篆刻額①であったが、それとほぼ同じ大きさのものが

た。その挨拶を読むと、昭和22年4月20日の飯田の大火の折、儒学者太宰春台生家跡にあった太宰松は枯死し、その材

に売り出した正林寺住職宮島好堅、後押したの時の市長松井卓治など峡谷の政財・飯田の名士たち数十人だった。

とりあえず購入者が

地の人たちは持っていたのだらうと羨ましく思う。経済じゃない、目に見えない汗の時間や手間や無駄や難解さの価値をもう一度見直さないと限り人は間違いなく